

# ニュースレター (vol. 4)

平成 25 年 1 月発行



Akita Namohana Network  
NPO 法人あきた菜の花ネットワーク



NPO 法人あきた菜の花ネットワーク

〒015-0801 秋田県由利本荘市美倉町 30 由利本荘市コミュニティ体育館内

TEL&FAX : 0184-44-8625 E-mail : tetsu1187pure@yahoo.co.jp

## 新年のご挨拶

理事長 石田哲浩

「うちのどいちちゃん、来年たんぼを作らないっていうけど、使ってくれない?」

県内各地域で高齢の人々が増え、荒れた田畑が目につくようになりました。手を拱いているとわが農業県秋田はどうなるか。祖先の汗の結晶を、たとえ僅かであつても設置するわけには、いかないのではないか。

菜の花であれ他の作物であれ、この土地に価値を与える絶好の機会がネットワークに訪れたように思います。

会員の皆様、夢を持って新しい年をお迎え下さい。



## 新年を迎えて

副理事長 佐藤政雄

会員の皆様におかれましては、健やかに新春をお迎えの事とお慶び申し上げます。年が改まったことで「期待と希望を胸に心機一転」グイッとやりましょう。

さて、昨年は菜種栽培をしている私にとって、いや会員の悩みであったと思われる菌核病防除に関する研究が頼泰樹先生によって実施され、本年にも農薬登録が完了される事が期待されます。

正に菜種栽培の一大転機となるでしょう。

親鸞に恵信が言った「ほら、どこからか梅の香りがするでしょう。やがて桃が咲き、桜が咲いてあちこちの湯の岸辺が菜の花でうずまり黄色い海になります。」

本年も宜しく御願致します。



## ～寄付・会費納入のお礼～

前回のニュースレターで、寄付および会費納入のお願いをしたところ、多くの会員の皆様から寄付・会費を頂戴いたしました。深く感謝申し上げます。皆様からお寄せいただいた寄付・会費は、地域活性化、資源循環型農業の推進、ネットワークづくり事業の財源等に活用させていただきます。なお領収書を必要とされる方は、事務局までお知らせください。

今後とも温かいご支援とご協力のほど、よろしくお願いいたします。



あきた菜の花ネットワークの事務局メンバーが、秋田を元気にするため日々奮闘している方からお話を伺い、先進的・独創的な取り組みやアイデアを学ぶと共に、会員の皆様にお伝えいたします。第4回目は、仙北市農林部総合産業研究所所長の高橋新子さんです。

旧西木村出身、役場職員一筋38年の高橋さん。地元仙北の事情に精通するばかりでなく、役場職員としてのスタンスをわきまえ、現場との距離感を絶妙に保ちながら、日々の仕事に打ち込むスーパーウーマンです。「役場は地域活性化のために何ができるのか」について、高橋さんのお話は大きな示唆を与えてくれます。



「“自信”と“誇り”が地域活性化の原動力！」：仙北市農林部総合研究所 所長 高橋 新子さん

○ネットワーク事務局（以下、事務局）：

まず、菜の花ネットワークと関わられたきっかけを教えてください。

○高橋新子所長（以下、高橋さん）：

以前、仙北市企画政策課で秋田内陸線の担当をしていました。その時に菜の花ネットワークの石田理事長が沿線に菜の花を植え、地域のみなさんの役に立ちたいと相談にお見えになりました。その構想は実現しませんでした。今年、西明寺地区で景観作物として『ひまわり』を植え搾油をすることになり、ネットワークの鈴木さんに協力をお願いしました。

○事務局：

現在所長を務めている総合産業研究所について教えてください。

○高橋さん：

研究所は2010年4月に農林部内に新設されました。その目的は、県内最下位レベルの分配所得を6次産業化や農商工連携によって引き上げることにありました。仙北市は、角館や田沢湖、駒ヶ岳など観光資源に恵まれています。食の分野が弱いとされていました。農業と食、観光を結びつけ、外貨を稼ぐことが必要です。取り組み初年度は異業種の方も含めた8名体制を敷き、新たな商品開発や農村商社の設立を目指しました。

○事務局：

意欲的な取り組みだと思いますが、事業は狙い通りに進んだのでしょうか。

○高橋さん：

事はそう簡単に進まなかったようです。各担当者が一生懸命商品づくりに取り組んだのですが、「新たな商品を作り、売っていく」ことは想像以上に大変でした。

私が所長を引き継いだのは昨年2011年の4月です。その後、いろいろな方との関わりの中で、このままでは研究所の目標達成は困難だと感じ、研究所の方針を思い切って転換することにしました。

○事務局：

具体的にどのように転換したのですか。

○高橋さん：

地域で頑張る先駆者からのアドバイスがきっかけ

でした。彼曰く「行政に求めているのは商品づくりではなく、環境づくり・ネットワークづくりだ。どこで誰がどんなものを作っているのか、情報交換の場を設けて欲しい」と。まさに的を射た意見で、目が覚めた思いでした。そもそも、研究所の母体である行政は「作る」「売る」という行為は苦手であり、民間の方が得意とするところ。以降、私たちは黒子として、現場の方々と相互につなげるネットワークづくりに本腰を入れるようになりました。

○事務局：

大胆な方針転換ですが、その効果がありましたか。

○高橋さん：

方針転換後、それほど時間は経っていませんが、様々な商品開発が実現しています。

その中のひとつ、「花豆」の取り組みについてご紹介しましょう。昨年のお花見において、仙北市を訪れた観光客に聞き取り調査を行ったところ「仙北市ならではのお土産やスイーツが欲しい」という意見を多くいただきました。そこで目を付けたのが「花豆」でした。花豆を生産から加工・販売まで一体となった取り組みを行っています。市内には以前から花豆を栽培している農家がありましたが、ほとんどが自家消費用でした。今では23軒の農家の方が栽培に組み、栽培面積は35haです。そして、市内のお菓子屋さんによって新たに開発された「花豆ぬれ甘納豆」は、今年の秋田県特産品コンクールでも高い評価を受けました。そのほか花豆は実も大きいので、仙北市の特産品の一つである「西明寺栗」とのコラボなども考えています。

ちなみに花豆は、花もとても美しいので「緑のカーテン」にもお勧めですよ。

○事務局：

商品開発をする上で、ご苦労されたことはありますか。

○高橋さん：

生産・加工・販売など、異業種同士の連携の中で、合意形成する難しさを感じました。生産者が「売りたいもの」と加工業者や販売者の「買いたいもの」は、マッチングしない場合がほとんどです。生産者がいくら良いもの、美味しいものを作っても、加工

業者が求めるものでなければ、受け入れられず、商品開発はなかなかうまくいきません。

加工業者は、①一定量を継続して供給してくれるか、②きちんとした品質のものを供給してくれるか、③一定の価格で供給してくれるか、の3点の要件が満たされなければ、生産者からモノを買うことはしませんし、もちろん農商工連携も定着しません。

○事務局：

そうした課題をどのように乗り越えたのですか。

○高橋さん：

私たちが取り組むネットワークづくりは単なる「商品づくり」ではありません。「地域を良くしたい」「お互いを良くしたい」「皆で良くなりたい」という強い思いがあってこそ可能となる取り組みです。各々が自分だけの利益を追求するだけではダメです。手を組んだ人同士が「Win-Winの関係（双方に利益がある）」であるように働きかけています。

大事なことは「地域を良くしたいという共通の思いを持ったネットワークづくり」です。ネットワークさえできれば、取り組みは自然と動き出します。そのため、研究所では情報提供や異業種間の交流の機会やマッチングなどを行い、みなさんを後押ししています。私は生産者や加工業者などのみなさんに「作るのも売るのもみなさんです」とお話をしています。また、生産者の思いや評価を伝えることができるのは料理人であり販売者です。様々な分野の人が手を組み、自分たちの強みを活かすことで、良い商品が生まれ出されます。

○事務局：

ほかにも関わった事業はありますか。

○高橋さん：

田沢湖近くの直売所の立上げがあります。この計画を実施することが決まったとき、場所の不便さから多くの人が反対しました。でも、地域で「やってみたい」という意欲的な人に集ってもらい、直売所のイメージづくりに約一年かけて議論を重ねた結果、単に商品を売るだけでなく人との交流を大切に作る直売所をつくらうと。「いろり」を囲み、飲食の提供なども行い、気軽に話ができるようにしています。そこを訪れた人は、買い物だけではなく、心も体もリフレッシュして帰って行きます。

○事務局：

商品だけでなく、商品の背景や作り手・売り手の気持ちも一緒に提供できるのは、素晴らしいですね。

○高橋さん：

私は旧西木村に生まれました。地元の県立角館南高等学校を卒業し、役場に入りました。ずっと地元に住んでいたため、地域の良さに気付かず、「ここはなにもないところだ」と思っていました。

○事務局：

今はどのようにお考えですか。

○高橋さん：

ある時、「東京にあるものがないだけで、東京にないものがここにはある」とグリーンツーリズムに取り組む農家の母さんたちに教えてもらいました。例えば「空気がきれい」「星がきれい」「窓を開けたまま昼寝ができる」など、私たちにとって当然のことが、とても価値のある素晴らしいことなのだ。

○事務局：

確かに、私たちにとっては当たり前のように思いがちですね。

○高橋さん：

はい。県外からの観光客など、外からの視点が入ることで、私たちの生活そのものに価値があることに気づかされます。例えば、農家の母さんたちは、都会から来た人が、自分たちの地域や料理に感激している姿を見ることで自信につながり、元気になりました。自信にあふれ魅力的に変わっていく母さんたちを見て「地域づくりって楽しいなあ」と思うようになりました。

○事務局：

それこそが地域づくりの醍醐味なのですね。

○高橋さん：

はい。都市農村交流の施策では体験受入人数が指標として求められがちですが、私は地域が元気になるということは、活動に参画する人が増え、各自が自信と誇りをつけていくことだと思います。また魅力的な人がいる地域には、おのずと人も集まってきます。

○事務局：

そうですね。では今後、どのような展開を予定していますか。

○高橋さん：

東京などに商品を販売に行った時に、ありとあらゆるものが溢れており、ここでは勝ち目がないなと思いました。そこで、都会で対抗して商品を販売するというよりは、仙北市に来て「買ってもらう」「食べてもらう」ことで仙北市の魅力を伝えていこうと。幸い仙北市はそうした高いポテンシャルを持っているわけですから。

○事務局：

「地域を丸ごと売っていく」視点が大切なのですね。本日は貴重なお話、ありがとうございました。

☆☆☆【事務局所感】お話を伺って☆☆☆  
・やさしい口調とまっすぐな目で話される高橋さんからは、地域や人を大切に思っている気持ちが伝わってきました（M）。  
・謙虚な姿勢でいながら、通すべき筋を通す高橋さんはとても魅力的でした。地域活性化に近道はなく、「人づくり」と「ネットワークづくり」を地道に進めるしかないのだと改めて思いました（W）。

限定 200 セット

## 《新商品のお知らせ》



『雪の想いで』（純米酒）と『菜ピュア』（菜種油）セット販売  
秋田県立大学の研究活動から生まれた“秋田の特産品”のコラボが実現！！

～『雪の想いで』のこだわり～

- ①豊かな芳香！：秋田ならではの幅のある豊かな風味
- ②知恵の結晶！：(株)齋彌酒造店・(株)三栄機械と産学共同開発



～『菜ピュア』のこだわり～

- ①安全・安心！（非GMO、トランス脂肪酸・添加物ゼロ）
- ②体にやさしい！（オレイン酸・ビタミンEたっぷり）
- ③おいしい！（豊かな香りとコク）

<価格：1セット2,600円（税込）>

【お問い合わせ先】(株)秋田ニューバイオフーム

電話：0184-33-4150

FAX：0184-33-4192

「お酒」と「油」のセットは、お酒をたしなむ方とおいしい料理を作ってくれる方と、ご家族皆様に喜ばれるセット商品です。



ぜひご贈答・お土産などにご利用ください。

## ～環境教育・人材育成の取組み～

平成24年11月28日（水）、秋田県立大学秋田キャンパスにて、秋田市立大住小学校の5年生（104名）を対象にした『菜の花を活用した校外環境学習』が行われました。当日は、同大学生物資源科学部 渡部岳陽助教が、「菜の花から始まるエコライフ」と題して、農業・農村に新しい価値を作り出し、“秋田元気にする”ことを目的に菜の花を植えていることや、廃食用油からバイオ燃料を作れることなど、地域活性化や資源循環・地球温暖化防止について小学生たちに伝えました。

また学習会では、同学部の大学生たちが渡部先生のアシスタントとして活躍しました。

このように、当ネットワークの取組み・目的を地域の子どもたちに伝えるなどの環境教育の実施を通じて、今後は更に「若い世代の人材育成」にも力を入れていく予定です。



校外環境学習の様子

（秋田キャンパス）11/28

## <編集後記>

○ニュースレターも今回で4号になりました。遠藤さん、仙北さん、金さん、そして今回の高橋さんと、本当に素晴らしいお話を聞くことができました。2013年度も県内各地を訪問し、たくさんの「熱いストーリー」を会員の皆様にお届けしたいと思います。本年も何とぞよろしくお願いいたします（渡部）。  
○新しい年をどのようにお迎えでしょうか。寒さが厳しいこの時期を耐えるからこそ、春の菜の花をあんなにも素晴らしいと感じるのかな…と、早くも春に思いを馳せています。先日、「第4回鳥海高原菜の花まつり実行委員会」が始動いたしました。皆様のご意見・ご協力お待ちしております～（宮崎）。